

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12258

研究課題名（和文）クレズマー音楽の変容プロセス 音楽の社会的機能と演奏家の思想との関係から

研究課題名（英文）The Transformation in Klezmer Music

研究代表者

三代 真理子（Mishiro, Mariko）

東京藝術大学・音楽学部・助手

研究者番号：30756820

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：クレズマー音楽は中東欧ユダヤ伝統音楽からワールドミュージックへと発展した。その過程で様々な環境の変化があり、この音楽の主な機能はユダヤ人社会の儀礼音楽からコンサート音楽へと大きく変化した。本研究では、クレズマー音楽史全体を四時代に分け、時代毎の社会環境が音楽の社会的機能や音楽構造に与えた影響を考察し、クレズマー音楽の変容プロセスを解明することを試みた。その結果、クレズマー音楽では、中東欧時代から続く特有の表現が伝統様式として現代まで伝承されており、またこの音楽は、聴衆の需要に応じて常に周辺音楽を取り込み、他の人気のある音楽と融合してレパートリーを拡大してきたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はクレズマー音楽の音楽構造と演奏曲目について、特定の時期ではなく、歴史的変遷を明らかにする点で新規性を持つ。従来のクレズマー音楽の歴史研究では、ヨーロッパ期、移民期、復興期ごとに、この音楽が演奏された社会環境、音楽の役割、演奏者に関する調査が実施されたが、時代変化に伴う音楽構造や曲目の変化に着目した事例はなかった。また社会環境の変化と音楽の役割の変化が、音楽構造や演奏曲目に及ぼす影響を具体的に検証する点でも独創的だといえる。

研究成果の概要（英文）：Klezmer music has evolved from traditional East European Jewish music to a major genre of world music. In the process, there were changes in the environment such as the migration of Jews, the decline and "revival" of Klezmer music, and globalization, and it changed significantly from ritual music in Jewish communities to concert music. In this study, the entire history of Klezmer music is divided into four eras. By examining the influence of the social environment of each era on the social function and musical structure, the transformation process of Klezmer music is attempted to elucidate. As a result, it is revealed that the modal structure and peculiar instrumental expressions of Jewish music in Klezmer music have been handed down to the present as traditional styles, and that this music has expanded its repertoire with incorporating surrounding music and merging with other popular music.

研究分野：民族音楽学

キーワード：クレズマー音楽 音楽の変容 東欧ユダヤ人 音楽復興 結婚式の音楽 ワールドミュージック 音楽のレパートリー

1．研究開始当初の背景

16世紀末に中東欧で誕生したクレズマー音楽は、中東欧ユダヤ人の伝統音楽からワールドミュージックの主要ジャンルへと発展した。その過程では、中東欧ユダヤ人の移住、クレズマー音楽の衰退と「復興」、そしてグローバル化等の環境の変化がありクレズマー音楽の主な機能はユダヤ人社会の儀礼音楽からコンサート音楽へと大きく変化した。本研究では、時代毎の社会環境が、クレズマー音楽の社会的機能や音楽構造に与えた影響を考察し、クレズマー音楽の変容プロセスを解明することを試みた。

2．研究の目的

本研究の目的は、クレズマー音楽の歴史的変容を解明することである。クレズマー音楽史全体を 中東欧時代（16世紀後半～19世紀末）、 ニューヨーク時代（19世紀末～1930年代末） 「復興」の時代（1970年代半ば～1990年代半ば） 現代（1990年代後半～現在）の四時代に分け、歴史的変容とその要因を明らかにした。

3．研究の方法

中東欧時代については、民族音楽学者モイシェ・ベレゴフスキの出版譜（**Beregovski 2001**）と民俗学者ズスマン・キゼルゴフの手稿譜（未出版）の収録曲を中心に、曲目と音楽構造を分析した。またゼフ・フェルドマン（**Feldman 2016**）等の文献で当時のユダヤ社会の状況や音楽に関して調査した。次にニューヨーク時代は、当該時期に録音された商業レコード等を基に曲目と音楽構造を分析した。「復興」の時代では、代表的な復興バンドである六団体の録音を比較分析し、曲目と演奏様式を考察するとともに、各団体のメンバーに聞き取り調査を行い「復興」の活動や思想に関する情報を収集した。現代については、ダビドウによるデータベースサイト **Klezmer Shack** の情報に基づき、現代クレズマー音楽団体の活動地域、時期、及び活動方針の全体像を把握した。さらに現代の主要バンドへのインタビューと彼らの録音分析、そして米国とドイツのユダヤ音楽祭での参与観察を実施した。

4．研究成果

（1）中東欧時代：16世紀中頃に、職業的ユダヤ人音楽家がクレズメルとして知られるようになり、ユダヤ人社会の内外で活動するようになった。クレズメルは、ユダヤ結婚式や、その他のユダヤ教の祝祭日等のために相応しい音楽を提供した。初期のクレズマー楽団は 4、5 人編成で、第 1、第 2 ヴァイオリンと、チェロ、ツィンバルで構成され、特にヴァイオリンとツィンバルは重要な楽器だった。中東欧時代のレパートリーに関して、前述のベレゴフスキの出版譜とキセルゴフの手稿譜に収録されたクレズマー曲、各 258 曲と 537 曲を対象に、フェルドマンによる四分分類法に基づき「中核の」、「移り変わる」、「地域内共有の」、「コスモポリタンな」レパートリーの四カテゴリに分類した。その結果、上記資料の収録曲にはユダヤ起源でユダヤ人のためだけに演奏される「中核の」レパートリーの曲が大部分を占め、特に「フレイラハス」や精密な三部形式の「スコチュネ」等が多く、ユダヤ人の結婚式と関連する曲が幅広く収録されていた。本成果は、論文「ズスマン・キセルゴフ手稿譜にみる 20 世紀初頭のウクライナのユダヤ民俗音楽」（東京藝術大学音楽学部紀要 第 47 集）にまとめた。

次に、中東欧時代のクレズマー音楽とユダヤ礼拝音楽（祈禱歌）の旋律に見られる旋法的な動きの類似性を調査した。クレズマー音楽の主要な旋法のうち、アドノイモロフ旋法とアハヴォ・ラボ旋法に基づく旋律を、同じ旋法に基づく祈禱歌の旋律と比較した結果、使用音階や転旋パターンに共通性が見られ、また旋律型や旋律線にも重要な類似性があることが判明した。これはク

レズマー音楽が、東アシュケナージ系の祈祷歌の旋法的特徴を受け継いでいることを示唆している。本成果は西洋中世学会 第 11 回大会シンポジウムで「中世のユダヤ礼拝音楽とクレズマー音楽 旋律の旋法的特徴にみられる両音楽の関連性」という題で報告した。

(2) ニューヨーク時代：19 世紀末から 20 世紀初期にかけて多くの音楽家たちが主にニューヨークに移り住み、ユダヤ移民集団等の需要を満たした。この時代の主な特徴を以下にまとめた。

ルーマニアとウクライナ出身者を中心とするクレズマー音楽家たちの活躍：この時期の音楽家たちは、1890 年代終わりから 1920 年代に米国に移住し、主にニューヨークで活動した。彼らの大半は、現在のルーマニアとウクライナの出身である。

レパートリーの変化：クレズマー音楽家たちは、少なくとも 1920 年代までは、ユダヤ人社会の結婚式等の行事で演奏する役割を保持していたが、米国への同化等に伴い、その役割は減少した。そして新しい音楽レパートリーに挑戦し始めたことで、彼らのレパートリーは大きく変容した。まず伝統的な結婚式の音楽レパートリーが縮小し、結婚式のための儀礼曲や舞曲は一部残ったものの、中東欧時代の中心的ジャンルであったフレイラハスやスコチュネ等、「中核の」レパートリーが急激に縮小する一方、他民族起源だがその後ユダヤ化された「移り変わる」レパートリーが著しく増えた。特に「ブルガール」はクラリネット奏者デイヴ・タラスが盛んに作曲したこと等により、この時期の中心的なジャンルとなった。

加えて、人気のあるイディッシュ民謡を器楽化したものや、イディッシュ演劇曲が数多くクレズマー音楽家によって演奏されるようになり、またラグタイムや初期ジャズなどのアメリカの主流音楽との融合が進んだ。さらに特にニューヨークでは、ギリシア、ロマ、トルコ等、他の移民集団の聴衆たちの需要に応えたため、それらの地域の音楽が数多く取り込まれた。

ジャズ等の米国音楽との融合：1910 年代からは「オリエンタル・フォックス・トロット」と呼ばれる新たな様式が生まれ、伝統的なクレズマーの旋律や旋法が、当時人気であったラグタイムやジャズのリズムと組み合わせられた。また 1930 年代からは、クレズマー曲やイディッシュ語の歌と、米国の主流音楽とを融合させた様式、「ジュイッシュ・ジャズ」が流行した。

曲名、楽器編成の変化、創作：この時代、78 回転レコードの商業録音が数多く作られた影響で、クレズマー音楽の曲名や長さ、使用楽器に変化が生じた。録音の販売促進のためにエキゾチックで魅力的な曲名や、独奏者の名を冠した曲名が新たに考案されるようになり、また録音時間の制限で、あらゆる舞曲や即興曲が約 3、4 分にまとめられるようになった。使用楽器については、ヴァイオリンに代わる旋律楽器としてのクラリネットの台頭と、金管楽器を中心とする楽団編成が挙げられる。クラリネットは 19 世紀の中東欧でも使用がみられたが、米国に移住したブランドヴァインやタラスらが、クラリネットの高度な演奏技術と表現を披露することで、この楽器は米国でクレズマー楽団の中心的な楽器として認知されるようになった。また当時主流だった米国の軍楽や吹奏楽の楽団の影響もあり、金管楽器中心の音色が好んで取り上げられるようになった。またクレズメル軍楽隊所属経験による弦楽器から管楽器への指向や、録音音質の追求、等も影響している。さらに創作に関しては、中東欧時代と対照的に、デイヴ・タラスやナフトゥール・ブランドヴァイン、シュロイムケ・ベッカーマンら、多くの音楽家が盛んに創作を行い、既存の旋律に新たな部分を追加したり、ダンスのリズム型の上で新しい旋律を作曲したり、イディッシュ演劇曲等の声楽曲を器楽へ改編したりした。

(3) 「復興」の時代：この時代は、20 世紀後半にクレズマー音楽が一旦衰退した後、再び興隆して現代の発展へとつながる上で重要である。ここでの研究対象は、復興創設バンドである、クレズモリム、アンディ・スタットマン、カペリエ、クレズマー・コンサバトリー・バンド(以下、KCB)と、復興第二世代のバンドの、クレズマティクスとブレーブ・オールド・ワールド(以下

BOW)の六つであり、彼らの活動と思想、音楽レパトリーと演奏様式について分析した。その結果、「復興期」前半ではユダヤアイデンティティが復興者の重要な動機であり、ユダヤ系アメリカ人の若者が自分のルーツ音楽としてクレズマー音楽に取り組んだことが「復興」の原動力であること、「復興期」後半では、復興者の演奏動機は「クレズマー音楽の持つ魅力」へと変化し、そこでは、椅子に座った聴衆を満足させることが演奏の狙いとなっていること、そして創設バンド四つは、それぞれ米国の東と西の両海岸で同時多発的に活動を始めたことがわかった。

また、上記六つの復興者・団体のアルバム収録曲を、伝統的クレズマー（中東欧から続くクレズマーの様式に合致したもの）新クレズマー（伝統的要素の中に他音楽ジャンルの要素を組み入れたもの）イディッシュソング、その他、の四ジャンルに分類した。その結果、復興期前半の四団体は、それぞれジャズとの融合（クレズモリム）ユダヤ教ハシッド派の影響（stattマン）イディッシュソングの導入（カペリエ）米国で発展したイディッシュ音楽の再現（**KCB**）というように異なる傾向を持つが、概してクレズマーの伝統様式に忠実な演奏が多い。一方、復興期後半では、他ジャンルの音楽要素の融合や、伝統様式からの逸脱が顕著にみられ、伝統的なクレズマー音楽の要素を用いつつ独自の手法が採用されている。クレズマティクスはアフリカのリズム、ケルトやアラブ音楽の音色等を用いている。**BOW**は、各奏者の芸術的表現を強く示すと同時に伝統的なクレズマー旋律を一つの物語性のある作品に組み入れている。

次に、復興以前に作曲された演奏曲について、テンポ、旋律、リズム、使用楽器の点から演奏様式の違いを調べた。その結果、いずれのバンドも原曲の演奏様式に基づきながらアレンジを加えているが、前半期の四バンドが原曲の再現の域を超えない一方で、後半期の二バンドは曲構成やリズムの点で原曲と大きく異なる。クレズマティクスと**BOW**は、どちらも伝統的な伴奏リズムを弱めている。前者は電子楽器やエコー効果などの前衛的表現や、アフリカン・ドラムなどのワールドミュージックの要素を取り込み新しい音色を追求している。一方**BOW**は、情熱的な旋律表現や複雑な和音や音型を用いて、曲の芸術性を高めている。

以上、クレズマー音楽の「復興」は、「自分たちの先祖の音楽」を発掘するユダヤ系アメリカ人の若者により始められ、そのプロセスは伝統様式の発掘・再生と、再生された伝統様式に基づく音楽創造と領域拡大という流れで進行した。このプロセスの推進力は主に、前半期ではユダヤアイデンティティにより、後半期ではクレズマー音楽が持つ魅力により生み出されている。音楽的には、「復興」の底流には「コンサート音楽化」があり、その中で各バンドが伝統的クレズマーの要素を様々な手法で扱っている。そしてこの手法の違いが、現代クレズマー音楽の多様性に繋がっていると考えられる。この復興期の研究成果は論文（東洋音楽学会機関誌『東洋音楽研究』第83号）にまとめた。

(4)現代: この時代においてクレズマー音楽はワールドミュージックの一ジャンルへと発展し、ユダヤ人以外の演奏家や聴衆にも広く受け入れられるようになった。

現代におけるクレズマー音楽の伝承形態について、二つのユダヤ音楽祭「イディッシュ・サマー・ヴァイマール」（独ヴァイマール市で毎夏開催）「イディッシュ・ニューヨーク」（米国ニューヨーク市で毎冬開催）にて調査を行った。そして下記の点から、ユダヤ音楽祭が現代のクレズマー音楽の主要な伝承の場として機能していると判断した。1)クレズマー音楽の「復興者」が、直接、口頭で教授している、2)イディッシュ文化の環境の下でクレズマー音楽を学んでいる、3)中東欧に残されたクレズマー音楽の発掘調査の成果を共有・伝承する場になっている。クレズマー音楽を生み培ったユダヤ人社会が消滅している現代において、クレズマー音楽をイディッシュ文化と共に理解できるユダヤ音楽祭は、今後もクレズマー音楽の伝承と伝播の場として一層重要になっていくと思われる。本成果は、論文（東京藝術大学音楽学部紀要第44集）及び

論文（東京藝術大学音楽教育研究室『音楽教育研究ジャーナル』52号）にまとめた。

現代の多様化するクレズマー音楽と演奏団体について、ウェブサイト等の資料を基に、演奏団体数、地域分布、活動内容、音楽様式について調査した。その結果、現代のクレズマー団体は、世界30か国以上に五百以上存在し、その半数以上が米国にある。演奏団体は、クレズマーを主に演奏する団体と、他ジャンルも演奏する団体に分けられる。に属する団体は、復興期以前のクレズマー音楽の伝統様式に忠実な「伝統的クレズマー」、クレズマーの伝統の中で新たな現代性を生んでいる「現代的クレズマー」、演奏内容が「他ジャンルとの融合」が主であるもの、の三つに大別できる。またの団体は、ユダヤ音楽ジャンルのみを演奏する団体と、様々なポピュラー音楽、民族音楽、クラシック等と共に演奏する団体とに大別できる。

復興を牽引し、かつ現在も活動中のKCBとクレズマティクスとBOWの三団体について演奏様式の変化を調査した。どの団体も1990年までは、曲構成、伴奏リズム、テンポ、旋律表現の点で「復興期」以前の演奏に忠実であるが、KCBが伝統様式による演奏を継続する一方で、BOWとクレズマティクスには変化が見られる。BOWは舞曲の伴奏リズムと旋律の関係を切り離し、旋律の変奏の幅を大胆に拡大した。また和音進行の複雑化や、現代クラシック音楽のリズムと和声の借用等、曲内で変化に富む工夫がみられる。さらに従来のメドレー形式とは異なり、複数曲を有機的に結合させ、統一された曲構成や物語性を作りだしている。クレズマティクスは異なるジャンルの伴奏リズムをクレズマー旋法と結合させ、電子楽器や口琴等の民族楽器により多彩な音色を生みだしている。またジャズのアドリブの導入や、急速なテンポのユニゾン演奏による演奏技術のアピール、複数曲を次々に交替させる曲構成、さらにクレズマー旋法と西欧の長／短調の混合等で、独自の音構造を作り出している。

現代クレズマー音楽家のスティーブン・グリーンマンを対象に、伝統ジャンルに対する考え方と、それが演奏や創作にどう結実しているかを調査した。その結果、彼は、クレズマー音楽の各ジャンルは、音楽的内容（リズム、旋律、様式）だけでなく、特有の性格や情緒によっても明確に識別されうると考えている。例えば、ジャンル「ターキシャー」は、コンサート音楽としても演奏されるが、グリーンマン氏は、その旋律は非常に滑らかなラインとそれに続く非常に短く鋭いラインという対照的なリズム動機の組み合わせを四小節単位で繰り返すことで「行きつ、戻りつ」の感覚を表現することが重要だと考えている。彼は、ジャンル毎の構造や情緒をできる限り保持しようと努めながら、そのうえで独自の作品を創り出すことに取り組んでいる。これは一人の現代音楽家の解釈に過ぎないが、クレズマー音楽の伝統的ジャンルは、中東欧ユダヤ人社会の舞踊や儀礼と強く関連していると推測できる。

（5）まとめ：クレズマー音楽では、ユダヤ音楽の旋法性や特有の器楽表現が伝統様式として引き継がれ、現代まで伝承されている。この音楽は、聴衆の需要に応じて周辺の音楽を取り込むという性質を持ち、常に他の人気のある音楽と融合しながら、そのレパートリーを拡大してきた。中東欧ユダヤ人社会の儀礼音楽として生まれたクレズマー音楽は、時代環境に適応しながら存続し、その基本的な伝統性を保ちながら新しい時代に応じた音楽として発展を続けている。

< 主要引用文献 >

Feldman, Water Zev. *Klezmer: Music, History, and Memory*, Oxford University Press, 2016.

Beregovski, Moyshe. *Jewish Instrumental Folk Music*. Edited and translated by Mark Slobin, Robert Rothstein, and Michael Alpert. Syracuse, NY: Syracuse University press, 2001.

Ari Davidow によるクレズマーの演奏家や出版物に関するデータベース Klezmer Shack <https://www.klezmershack.com/> （2022/06/13 アクセス）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 三代真理子	4. 巻 52
2. 論文標題 ユダヤ音楽祭の ワークショップにおけるクレズマー音楽の指導法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三代真理子	4. 巻 第83号
2. 論文標題 クレズマー音楽の復興プロセス 復興者と演奏レパートリーの観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋音楽研究	6. 最初と最後の頁 87-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三代真理子	4. 巻 第44集
2. 論文標題 現代におけるクレズマー音楽の伝承と伝播	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	6. 最初と最後の頁 123-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三代真理子	4. 巻 第47集
2. 論文標題 ズスマン・キセルゴフ手稿譜にみる20世紀初頭のウクライナのユダヤ民俗音楽 クレズマー音楽を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京藝術大学音楽学部紀要	6. 最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 三代真理子
2．発表標題 現代クレズマー音楽の演奏様式に関する研究
3．学会等名 一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団 第39回研究助成受賞者講演（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 三代真理子
2．発表標題 中世のユダヤ礼拝音楽とクレズマ 音楽 旋律の旋法的特徴にみられる両音楽の関連性
3．学会等名 西洋中世学会（招待講演）
4．発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>キセルゴフとマコノヴェツキのデジタル手稿譜プロジェクト https://klezmerinstitute.org/kmdmp/</p>

6．研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------